

概要

活動地域:岩手県九戸郡野田村
 活動期間:2011年7月28日～継続中
 活動体制:工学院大学 野澤研究室
 八戸工業高等専門学校 河村研究室
 首都大学東京 玉川研究室
 首都大学東京 市古研究室
 活動キーワード:東日本大震災、復興、生業、CWS



2015年度活動メンバー

M1 笠原 彩香 / B4 新井 琴美 杉浦 美穂 / B3 中野 慶 八木 聖輝

野田村の魅力・財産を伝える

～民泊体験で学んだ野田村らしさを発信したい～

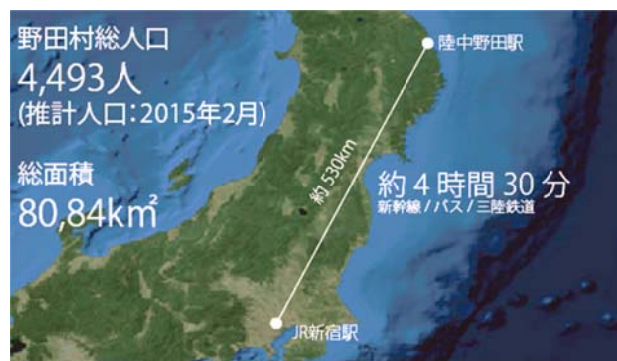
活動経緯

2011年3月11日に起こった東日本大震災において、岩手県野田村では、津波によって村内の住家1/3が被害を受けるなど、中心市街地や漁港など広域にわたって甚大な損害を被った。

2011年度より八戸高専の河村研究室、首都大学東京の玉川研究室と市古研究室、工学院大学の野澤研究室、計4つの研究室が主体となって、復興まちづくりを提案するCWSを行ってきた。この4つの研究室では都市や建築について勉強しており、その知識を活かしてまちづくりの提案を行っている。

活動対象地概要

「北限の海女」で有名な久慈市、「黒崎海岸」が美しい普代村、また日本三大鍾乳洞に数えられる「龍泉洞」で有名な岩泉町と隣り合う。特産品はホタテ、ワカメ、ホウレンソウ、食用菊、山ブドウ。ドラマ「あまちゃん」で話題になった、三陸鉄道が通る野田村。駅名は「陸中野田」。震災で被害を受けて一部運休をしていた三陸鉄道は、2014年4月1日全線で運転再開をし、さらに盛り上がりを見せる。



昨年度までの活動内容

2011年度、2012年度は復興初期段階として、中心市街地のゾーニング等の復興まちづくり提案を行ってきた。2013年度からは、より住民意識を理解し、野田村に寄り添った提案を行うために生業体験を始め、2014年度には民泊体験を開始し「住民と共にまちづくりを考えること」を目標とした。

今年度は、昨年度の民泊体験を受け継ぎ、体験合宿のメインとした。また、初日には村の方を招いた交流会を行い、これまでの活動を知っていただくために野田村CWSのPV上映を行った。こうした活動の中で、村民との距離を縮め、野田村に根付くような提案をすることが目標である。

2015年度の活動内容

体験合宿記録

- 1日目:被災地ガイド、交流会
- 2日目:野田村役場 特定対策課 明内さんと懇談会、各班に分かれて民泊体験開始
- 3日目:民泊体験
- 4日目:民泊体験、帰省



【農業班:笠原、新井】

農業班は、ほうれん草農家のお宅へ民泊させていただいた。



- * ほうれん草の出荷作業のお手伝い
- * ほうれん草料理の作製
- * 大角豆の仕分け

を行い、充実した民泊活動となった。

今回、農業班の提案として、「野田村と都市をつなぐ」をテーマに、ほうれん草のレシピブックを作製した。(図1)

(和え物、コロッケ、シチュー)

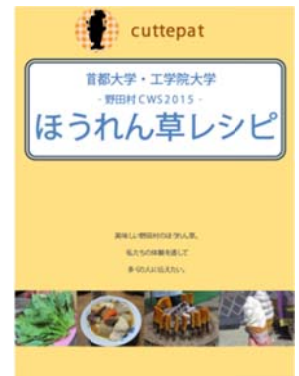


図1

☆ QRコードを活かした情報発信

野田村と、都市をつなぐにはどうしたらいいか。「都市農業」が注目される今、QRコードを利用してレシピや特徴等の情報配信という提案を行なった。

1. 出荷する野菜の包装にQRコードを貼り付けて出荷する
2. QRコードを読み取ることで野田村や農業の魅力を知る。

今後、より具体的な内容にしていき、持続性のある提案をすることが課題である。

【商業班:杉浦、八木】

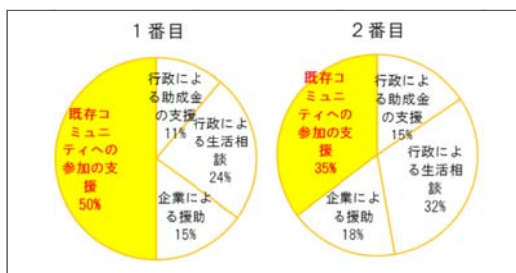
商業班は、農家兼農家レストランを営むお宅へ民泊させていただいた。



体験合宿中に行った、野田村商工会長へのヒアリングの中で「野田村の商業資源は沢山あるが、商業のなり手がいない。」という話を伺った。そのことから、体験合宿後に未来の商売主・顧客になりうる学生を対象に、「野田村について」「東北地方の村落への旅行・移住について」等をアンケート調査を行った。(首都大学東京、工学院大学、八戸工業高等専門学校の学生を対象)

アンケート調査の結果としては、「地方で生活するにあたりあると良いもの」では、既存コミュニティへの参加の支援に高い関心があることがわかった。また、「村落に住んでみたくない理由」として、生活する上の友人がいないからという回答が多く、若者の移住にはコミュニティ支援が必要だと考えられる。

今後の提案としては、NPO 法人「のんのりのだ物語」の野田村大学の活動に着目し、野田村の若者と村外の若者の、交流を促進できるようなプログラムを提案していく。



地方で生活するのにあると良いと思うもの (上位)

【漁業班:中野】

漁業班は、ホタテ漁を行う漁師さんのお宅へ民泊させていただいた。



- * 魚のさばき方、ホタテの身の取り方講座
- * 漁港やホタテ漁の見学し、漁師さんへヒアリング等を行った。

体験を通しての提案としては、①野田村と学生の交流持続②野田村と学生が協力して第三者と交流③野田村と第三者が交流をキーワードに、「村を見つめ直す、発見する教育プログラム」等を提案を行っていく。